

『meteor』

ただいま

我慢して得たモノでまみれたカラフルな部屋

埋もれた身体で向かう新たな惑星

青いあなたに逢いたくて

剥がされていく 別れも楽しくて

好き勝手やって死んでも明日は続くだろう

苦労して暮らして寿命が来ても

だけどまた『おはよう』と笑う太陽

でも知ってる？

皆の普通ってあなたの普通じゃないんだよ

水中 宇宙 もうすぐ来る陣痛

証明 理由 いらない 感じる夢中

死ぬ時は死ぬんだ それだけだ

知る時に知るんだ なんなら諦めな

相対性からはぐれて『一つできる事』

突き詰めたその時に見えたよ虹色

これからは君を愛した様に

今の自分を愛してみるよ

あと少しの人生だったとしても

『電気信号言語ヴェルチカ』

月月火水木木金曜日 黙々仕事も向き不向き 365仕事する振り

もう目覚まし いらぬ窓からぼい すると2度寝しない あら不思議

だいたいギリギリもしくは遅刻 ハラハラドキドキが好き

でも指摘されるとふてくされる ただただ刺激が欲しい

あの臭い〇〇〇と一緒にしないで欲しい 真っ向からぶち当たるマッコウクジラのように

真っ当に生きていがヴァギナデンタタの牙をへし折りにいく

ただ先にイク私を許して欲しい 戦いと言いつつ中指も立たない

特別と自覚してて普通な振りする あんた達を嫌ってお前らを愛する

上の空 相づち打つなら頬を打つ 穴に入れるのは簡単だから

バンカーを狙って楽しむタイガーウッズ うつつ憂鬱ならさっさと死ぬ

自分の渦に広がる宇宙でヒデブ&安堵する暇なく輪廻転生

『先生、1問目からタカシ君が108円の林檎を108個買いに行って

108の煩惱知る旅に出て 帰ってきません。』

『答えはまだありません、、なので皆100点満点なのです。

皆さんも飽きるまで堪能してください。』

60%の水とタンパク質 脂質 無機物 糖質なら後から追いかけてくる

今日の飯考える合間の暇つぶし スクラッチする地球儀

電波 受信する頭 口から電気信号言語ヴェルチカ

我慢なら腐る程したドレミファ 空気振るわす曼陀羅

端から見たら白旗か? ご機嫌な服を着た心は丸裸

馬鹿な振りはやめだ 馬鹿なんだから 帝王切開して産むアイデア

『tooth powder』

寝ぼけ眼 ボサボサの頭は無重力から帰って来たばかりで

まだ慣れない重量 洗面所 目覚めに喜んだ髪の毛は何度 手で押さえても

ぴよこん

寝癖より散らかった毛先の歯ブラシを手に取り 泡だらけにならないように

ちょこん

とイチゴ味ではない歯磨き粉

黄ばんだ歯 基盤はまだ 入れ歯じゃないだけましか

またアラームかと思いきや着信

何故かです 投げかけられる言葉にモゴモゴモゴ

『食べ終わってからにしる』いや、違うんです

ですがごもっとも

確信的な誰彼にまた後で あれ どこまで磨いたっけ？

また最初からで やれやれやけに綺麗な右下7番の謎はこれ

歯垢よりも先に腑に落ちる思考の『なぜ』

それでも色あせないあなたは誰？

落としたいのは いつの臭い いつの汚れ

甘い記憶が蝕んだ痛みは今頃になって

やってくるんだろう

なんでって言ったって

もう白くはならない 今のピカピカと笑え

シャカシャカシャカ 鏡の中にはまだ眠ったままの釈迦
真っ新たな朝 世の中の曇り空を綿飴と思えるのなら どれもが虫歯かな
真っ逆さまに見たって血が上る頭 真っ赤っか
ハッカ味のドロップは未だに食べないけど なんだかんだ慣れたミント
習慣に隠されてるヒント 瞬間にぼやけたピントはきっと
あくびの時の涙のせいさ
じっとしてるのも疲れたから 気持ちよく寝れるまで
くたびれてみようかな せめて今日だけ
明日の事なんてノストラダムスも面倒くさがって予言したくもないよ
わかるのは火曜の次は水曜 8日の次は9日って事
あと冷蔵庫のタマゴが賞味期限が迫ってるから
目玉焼きにして珍しくソースでもかけよう
そんな能書きを垂れながら避けて通る左上6番C2
さっきの思惑なんてすぐ 忘れてどうせかけてる 醤油
ガラガラペッ 虫歯の痛さも またいつの間にか忘れちゃって
ガラガラペッ 生え変わらないのに大事にできないね
落としたいのは いつの臭い いつの汚れ
甘い記憶が蝕んだ痛みは今頃になってやってくるんだろう
なんでって言ったって
もう白くはならない 今のピカピカと笑え

『hohetoy』

直覚信頼 腹這いの先の快樂またとない またトライ ハイハイ

空みたいな深海 ララバイの後の開拓 跨ぐライン また出会いバイバイ

よっ前世ぶりだね。お元気ですか、えっ覚えてないって んな事また言って
泣いて笑って勾玉削ってたお前 あっとそれは紀元前 この前はミジンコ、アオミドロ

まっ なんでもいいや出会えたならまた豎穴式住居の頃の様 日が登るまで果てて

最果てまで生きる為 ラジカセ片手食べ物探して回った夕焼け

ごちゃ混ぜになってるけど意味は変わらない だろ？ おはよう

あの時も鳴ってたのはこんな音 昨日の晩御飯を思い出す感覚で

リズムをとれ 覚えるな 思い出せよ

レミファソラシドドほへというはに 死ぬまで生き延びろ 赤い血潮のブルース

何食わぬ顔 口ずさむメダパニ 俺もお前も美しきブス

もうとっくの昔に壊れたスカウターと万歩計

あなたの戦闘能力も私の消費カロリーも忘れて すってんてんでも捨てれね

心を見てくれ 手遅れ なんてね 明日までの余命なら掴め今日の風

動けねえなら無限の創造性にまかして悔いの無い全力のおねんね

ごめんね こんな事しか言えなくて なんて事は言わねよボケ

ありがとうの明かりを灯しに行こう へその緒の向こう

いつもニコニコの誰彼にも 大っ嫌いなあいつにも 中指の裏側に愛してやるよの独り言
とことん 今度こそなんて無いから 元々無い殻に閉じ籠る自ら 色を笑われたからか？

それだけ笑顔にさせられるならカッコいいじゃんか タイムボカンみたいに散り様

ジャイアンみたいに土管の上でされけ出せ言霊 事柄なんてついてくる後から

改めましてこんばんは それでは合い言葉は

レミファソラシドドほへというはに 死ぬまで生き延びろ 赤い血潮のブルース

何食わぬ顔 口ずさむメダパニ 俺もお前も美しきブス

直覚信頼 腹這いの先の快樂またとない またトライ ハイハイ

空みたいな深海 ララバイの後の開拓 跨ぐライン また出会いバイバイ

独特という曖昧な名前に見え隠れするドクンドクン

君と僕、服と肉を脱いでSEXより気持ちいい沈黙で語り明かそう

あたかも最初から知っていたかの様 上がる緞帳

昨日まではつまり準備運動 そして今からが始まりの始まり

眩しいスポットライトを避け内なる光で光合成 さあ 一緒に照らしに行こうぜ

生まれる前 アルバムにない記憶を辿り DNA下りを登れ

求めてたモノは最初から持っていたモノだろ どうせ

ところで 僕等は何をしにこんな所へ? ついでだ遊ぼうぜ

出会い別れ また会おうってセリフは百万回目。

レミファソラシドドほへというはに 死ぬまで生き延びろ 赤い血潮のブルース

何食わぬ顔 口ずさむメダパニ 俺もお前も美しきブス

『テトラポット』

残業の残響音 嫌気がさして 今日は無理くり定時帰らせて

この時間だとかんなに込むんだっけ？

満員電車がこんなにも苦痛じゃないなんて

笑えるね 没頭してロボットな腕 ぼーっとして人間な気がして

躓いて怪我して 垂れた血を見て痛くなって生きてるなんて感じて

笑えないね 痙攣してるのか 知らないまま ポケットから鞆

奥にしまうTEL ネクタイを緩める 何処に向かうのか最寄りの駅を通り過ぎた

トンネルを抜ける 太陽が溶ける海が見える

いつの間にか 吊り革 必死に掴んで突っ立ってたのは

私一人 知らない駅 手を引っ張られる様に降りた

また新しい懐かしいを見つけた

『寂しくない』 静けさが包む 心地いい空腹

裏路地 帰る様に進む 灯台の在る方へ

疲れはとれ 取り憑いた亡霊 悪い気はしないから 踏切を越え

町外れの浜辺 鼻で 肌で感じる磯の香り

両手広げて 今はどんな顔に？ 誰かの前にはない色味

些細な音に気がつく程 消えた音

時間が流れてる事 思い出す止まった午後 黙った咆哮

エピローグとプロローグの狭間で揺れる蠟燭

海に広がる星空を飛ぶクロール

夕暮れる 生まれた時のまま波に揺れる

足掻いた歌詞が白ける朝焼けが眩しく照らす

群れから逸れたテトラポット いつになく思い出すよ ずっと

向こうばかり見てたからきっと 振り返るのが怖い 本当はもっと

ととと 辞めてしまえば

いつの日か役に立つからとっておこう この所

こない『もしも』に もしもしと しどろもどろ

悩んでも先が無いのに戻ろうともせずに しかたないの芝居はどっちが本物

奥に仕舞った『もの』『こと』『ひと』

たった一言が出てこない どツボ ヒーローはどこ？ 人事にして独り言

日ごとに 仕事に 求めた富は笑みじゃなく 隣の嫉妬 妬みが心地良い勝利
表裏 思い通りに使い 物足りないと余所見 持っていたモノにも届かない距離

たまの興味すら本当の私の思い？ もう遅いと手負いを装い

人の波 浮かぶだけで泳がない自分が嫌いだった

笑っているのに楽しくないのはさっきまででいいじゃないか

夕暮れる 生まれた時のまま波に揺れる

足掻いた歌詞が白ける朝焼けが眩しく照らす

群れから逸れたテトラポット いつになく思い出すよ ずっと

向こうばかり見てたからきっと 振り返るのが怖い 本当はもっと

できるはず だったかな？ 誰に勝つ？表と裏のどちらが命を絶つ？

それとも死ぬまで来ない何かを待つ？ 私は今からここを発つとしよう

瓜二つなあなたはいつそこに立つ？

『とわとわとわ』

『31歳 男性会社員』

白々しいハイビームの対向車線が続く 寂しい街灯に虫が寄り添う下道
窮屈な革靴が押し出したスピードを操る ぼんやりなハンドル捌き肩の荷を明日に
預けた仕事帰り 憂鬱を知らないカーナビと喋っていると不意に『ドン』
何だろう 読み捨てられた雑誌？トラックの荷台から溢れた砂利？それとも....？
曖昧にしたいバックミラーの狭い視界から確認 無言こそ叫び BGMは念仏に様変わり
でも、ごく普通に家に帰る着く
ワイシャツのボタンを外しながら淡々と上の階段『バタン』と無力さで戸を叩き付け
いつまで経っても回ってこないつけに戸惑う手が弄り点ける電気
流行り廃り脱ぎ捨ててセンチを枕に隠した仏頂面には湿気った布団が聖地
元気な睡魔とダイブたぶん、疲れてたんだな、だいぶ
『数分だけ』と明らかな嘘に目を瞑る思考が泳ぐ ブルーなグループ
岸から沖と随分 もう引き返せない水域 お風呂に歯磨きは繰り越し
やめる息継ぎ 沈む意識 揺らぐ明かり 当たり前のように毎日、味わう臨死体験
辺りは深海 あくびしてはCO2と浮かんでいく喜怒哀楽
鋭利な暗闇に斬られた事に気付かず数々の手付かずの野望を悔やむ暇もなく、
死ぬ感覚に似る深い眠りにつく 無が呼吸するZZZ
寝返りをうつスムーズに見えたが毛布に引っ掛け抜ける心身を繋ぐプラグ
津々と湧き出る意思 レム睡眠 水深10'912メートルをスイミング
底には経験した程 光る珊瑚礁 ふと、触れると....

物音のないモノクロ ストロボの閃光

掻き分けるスローモーション 『出口は近い』 不思議と解る

ストレッチャーが加速する方向 瞼の裏の眼光が見つめる先に本当の想像
徐徐に聞こえてくる逆再生のモスキートーン いつの間にか俺が忘れた幼気な僕の足音
色々なフォントを切り貼りした暗号が降り注いだ後
いつかの自分に合わせる私の波長 ここはどこ？

『92351歳 龍の子供』

フッと広がる視界 足下でうごめく住み慣れた街は
もう あんなにも小さい 青と白のコントラストの誘い
魔法使いの様 空を飛ぶ 飛行機雲を伝い息をのむ色彩
実に愉快 さっきまでの辛気くさい考えなんてくだらない
だって何でも思いのまま何てったって僕の夢の中
何なら明るく朝までひたすら悪戯 でも なんだかちょっとだけ疲れた
稲妻の音も遠くに聞こえる程 登り詰める入道雲
そんなふかふかのベッドでしばし目を瞑りカタツムリの様に丸まり一休み
のつもりがいつの間にか暖かい陽射しがレースを突き抜けた居間にいた

『10歳 小学生』

座布団を枕に くっ付けた懐かしい背中 匂うセピア ただいま やっと帰って来た
いつもの光景 いつまでもある気がしている 時計の針の音と台所からのトントントン
出る前から友達だとわかるピンポン 駄菓子屋をはしご
とことん鬼ごっこにかくれんぼ、何から何まで隠れ蓑

床の木目 天井の染み すきま風 ミク口にまで意識を通わせ、
押し入れの中に広がるマクロ 真っ黒になるまで遊ぼう
真っ暗になってまで騒いでは、お腹が減ってまた明日
障子に空いた穴から機嫌を覗く 財布からくすねた小銭が詰まる喉の奥
何も言わずにゲンコツ 『いただきます』 『ごちそうさま』
アイスはお風呂を上がってから パンツ一丁のままハマり出すインディージョーンズ
CMの間にガラガラペッ 九分九厘見れない最後まで
うとうと いつの間にかタオルケット 明日こそ ちゃんと謝ろう
そして ありがとうと 不意に滲みる焼香に目を細めると...

『21歳 アルバイター』

ビルの山脈、その麓 揺れる赤と黒 点灯するハザードランプの黄色
冷んやりとしたアスファルトに へばりつく血の付いた頬
朦朧としながら起き上がると 360度、踊る様に立ち上がる煙と炎
何かの事故？それにしても 生きた人が見当たらない...
戦場？バイオハザード？ブラックアウトから何時間後なのだろう
ゴソゴソと何処からともなく ゾンビに貞子 エイリアンに銃を持った黒服
仲良く追いかけて来るカオス 100mを1時間半で逃げ回った挙句
タスポじゃ開かない駅の改札 『誰か助けて 遅刻する』

『29歳 転職中の女性』

そんなキッカケ 心が折れ追いつかれ 目を塞いで目を覚ました

まだ続く真夜中 毛布の中 必死に手繰り寄せた温もりのある掌

指を絡め 安心を必死に握り恐怖を締め殺した

埋めた頭 赤ん坊をあやすように 優しく撫でてくれるあなた

指先から溢れ始めた熱が伝染し ほどけなくなる程 浸す身体

匂いを許した舌が滲む様に口から耳 首から乳房 上から下

ベットの軋みなんか気にせずに 覆いかぶさり愛してくれる

君 キミ きみ 『君は誰だっけ？』

なんて考えがベールをめぐり上げ 色々と言いたい事をまとめた

『またね』の一言で別れ告げ夢から覚めた

『31歳 男性会社員』

おねしょと疑うような汗 手探り掴んだ携帯電話

仕事までもう一眠りできるとしかめっ面

紫に染まり始めた外に消す電気

徐々に透けていく一番星と三日月は 今もそこに

冷蔵庫から取り出したお茶を飲み干し

いざ もう思い出せないないさっきの夢の続きを見に

『23歳 黒猫♂』

夜道を歩く物書き 年老いた毛並み 軒並み あの骨董屋までがテリトリー

生涯ライバルだった八百屋の三毛は先に逝った

右目が悪いのはそいつのせいだ

ふん 清々する これで書き溜めた小説のオチにも専念できる

想像を膨らます お気に入り郵便局のポストへ向かう途中

チカチカと命が尽きそうな街灯

最後を看取りにどこよりも虫達が集まってくる 目を丸くしていると

開いた瞳孔と起てた耳には痛い程のハイビームとクラクション

ビックリして動かない身体 辛うじて回る足と足の間

真上を通り過ぎて行った鉄の怪物

危なかったと唾をのむと一緒に飲み込んでしまった毛玉 今度は気をつけてと

それでも ピカピカ目玉のないやつもいるなんて思わなかったよ

左半身の激痛は一瞬

自分の腸を目の当たりにするなんて初めてだけど嬉しくはないものだね

せっかく物語の続きを閃いたのに

後は読者の想像に御任せしますというしたくない幕引き

薄れ行く意識の中 右目に写る三毛はずいぶん退屈していた様だった

登ってゆく21グラム 溶けてゆく真っ暗な空白

無に見えるだけでそこに在る それぞれの円

この先も一瞬が永遠に続く？ キツくても楽しくてもいつ気がつく

傷つき傷つけ繰り返す傀儡？ 信ずる嬉しくて流るるその雫

『-87465938724歳 宇宙飛行士』

私 事象の地平を目指す宇宙飛行士 追い求める最後と最初
光の速さを追い越す事に成功し やって来た魂 刻み込んだヒトゲノムの細胞
ひんやりと優しいエメラルドグリーン陽射し 人工的第三の太陽
白い草木が茂る金色の大地 停泊したスペースコロニーに打ち寄せる波動
進歩した科学と満ち足りた魂魄 『自由』という束縛から解放した108
裁く者も裁かれる者も居らず 罪も無く 包み隠さず 慈悲深く抱く安楽
数える事を忘れた暦 『平和』という言葉を失った1つの星 国 町
私は私 あなたはあなた 1+1は1 点が重なり点となった
ここに君が来るのをゆっくりと待つと決めた
そんな私を待っていてくれた人がいたのだ
いくつもの名前の中でもお気に入り『ヴェルチカ』と名乗る吟遊詩人
新人の私に優しく案内をしてくれる 時に意味深 手渡してくれた蕾と花瓶
一陣の風が通り過ぎ 開く一輪の閃き 『覚える』から『思い出す』に
『過敏』から『敏感』に変わると手を引いて実験中と聴くピーカーの元へ
高層ビルの様に大きく 地面に向かって伸びる天体顕微鏡
最上階まで登って覗き見る銀河系
そこに見る地球は何億年前? 懐かしい風
ガガーリンと名乗った時とは少し違ったトーンで口にした
『地球は青かった』

『31歳 男性会社員』

無意識に止めるアラーム 99秒のスヌーズ何回目？

毛布の下でめげない目覚まし時計に分かってるって

うつ伏せ 仰向け 何度寝 3つ目の最終防壁が叫ぶ前

飛び起きるいつもの流れ

遅刻ギリギリだが、落ち着き慣れた手つき歯磨きにシャワー

先に淹れて少し冷ましたコーヒーを飲み 浅い夢から深く目を覚ました

靴紐を結び終えた後に気づく リビングに忘れた車のキー

四つん這いになって取りにいく そこまでがワンセットいつも通り

『いってきます』にシャイな205号室は無言の『いってらっしゃい』

あくせく焦る気持ちが押し出すアクセル 昨日のあの場所には何も無く

心なしか間があるナビが口を開く

『もう繰り返す必要はありません この道は飽きました

海でも見に行きませんか？ 今は右目も見えるんですから』

無言で相槌を打つ スピードは緩く

ゆっくりと過ぎてゆく曇り空の美しさに気付く

永遠と和と輪 線と線の交わった点 連なる輪っか

尖った咎 届かない扉 予言者の知らない向こう側

『wakka』

働く 食う 寝る 燻る レム ノンレム

揺れる 幽霊 告げる 口パク 継げる

続ける 辞める 浮かぶ プール ブルー

落ちる雫 リング うねる 委ねる

忘れる 思い出す 約束の日は今日だったはず

知ったかぶるな 知らない事を知るのはこんなにも幸せな事なんだから

なんだかんだ 地団駄 だが時間だ カンカンなお天道さんは なんと行った？

どちらが違和感 懐かしい明日 鈍感になる知識はいらん

淫乱に乱れる魂の味わい方はいかが？ 札束の下 高高伸びた鼻 肥えた腹 満足か？

それから？ 一生長閑なんか一人二人じゃつまんねーよ

誰よりも強欲だから知らないあいつの幸せを願うんだ

運がなくても泳ぐ運河 産んだ苦しみなんか忘れてさ 今朝から誰でもない顔でいな

良いか悪いかに収まるつもりか？ つまりは詰まった痼りは人と人の間

全力でシコると見応えがあるのは確か 致し方それぞれの持ち場

一番とは何か どんな黄金よりも輝いてらあ その目玉

枝別れしてもどうせまた会えるから 陸に上がるイルカ まだ歩ける ははは

田畑を耕す様に人の畝に植える種 暖めますか？ 少し開封させて頂きます

精神的な幕末 ますます増すマイナス 有りもので開発 顔パス三途の川の改札

暗いニュース 地獄とを感じるこの世を天国に変えてやる

だから早くこっちに来いよ 欲深く 欲する何にもいらない感覚

味わい尽くす人肉 筋力ではなく気力 バーベル 持ち上げる地球
母の子宮 至急 応答どうぞ 待ちわびた胎動 ようこそ 百八の波動

目覚める 何時でも 何度でも demoではない人生を
手と手と合わせた温もりは憶えてるけど
悲しみ憎しみは暗闇を進む為に燃やして灰になった昨日
お気の毒な情報でまたクラったとしても
生きる為に命を食らってる今日 途方のない旅路
やりがいで白米おかわり あんたは私の生き写し 大嫌いっていうところも大好き
なりふり 駆け引きはちょっとしたお遊び
肉体をくれた両親の背中に眼差し 越えるなんておこがましい
月と太陽 私の方が後なら 体温が無くなるまで介護していたいよ
愛する人の何を汚いと言うのだよ
やらなくちゃいけない事がたまたまやりたい事なだけ 怠けて遅らしてきた今まで
『いや 待って』 てっ憧れの制止を振り払って飛べ
時に黙って生死の狭間で静止画の連続
さっきまでとは違う自分であれ
選ばれたんじゃなくて何度も苦しむ事すら選んだんだろ？
もう飽きただろ？ 苦なんかなしに楽に生きて何が悪い 腹くくって幸せになるう
昨日まで上手くいかないからって今日も同じだと思ふなよ

味わい尽くす人肉 筋力ではなく気力 バーベル 持ち上げる地球
母の子宮 至急 応答どうぞ 待ちわびた胎動 ようこそ 百八の波動

『意の中の蛙』

曇り後 雨の予報はハズレ 大衆を吹き抜けて来たかのような風が連れて来る情報は俄雨

穴の空いた手提げを両手いっぱいにつら下げ 頭から爪先までずぶ濡れ

私は追うことに追われている健気

何を踏んだのか分からない見栄っ張りな靴で轍の上を走って

滴るあいまって 努力した気にさせる満足気な汗

ずっと遠くまで見通せるような眺めを描いた張りぼてに寄り掛かる

虹がかかる頃には また走れとシャツが乾く 見上げるも事もなく

世界を見てた狭い視界で 支配に逆らっては『はい』と『いいえ』の選択肢

全部 自分の意思で選んだ 徐々に無い実力に黙り 愚痴をこぼすいいなりは心地いい

ふと頭を傾げると昔からの夢は引き下がれないだけで淡い負けず嫌いの

『見返したい』が次第に盲目にさせた未来

私の目と他人の目の間に 気付きたくない自分が肥大 報復で得る幸福に浸る井の中の蛙

深いコンプレックスの牢獄に差し込む橙が染みる ミュートされた慟哭

同時刻こことは程遠く 異国の空の下 降り注ぐ銃弾と血と涙

○ × △計りのついたコップで飲み干しては欲しがる罰 自ら錯覚

バッドエンド好きが吐いた偽善のゲロ 溢れる水嵩が覗かせる井戸の外

本当の事を教えてくれと足掻く程 絡まる空回る意図の底

増え続ける疑問符を毛布で覆うも眠れぬ夜 震えるカーソルが触れるタブー

そこで得る知識も勿論『たぶん』不運な事故も文字と数字で見ると『ふーん』で終わる

ハイフンよりも繋がった関係を探すも幾度となくグロテスクなデスクにひれ伏す

ひねもすよもすがら まだ足りないとプラス インプット下したお腹

書き出したペンシル インクジェット 丸めたしゃくしゃ

くたくたの身体 嫌いな臭いも確かめる鼻 最初の一口だけ味わう舌

イヤホンで塞いだ耳 指先が辿る流行りが反射する瞳

今という言葉が勘違い 目の前は私次第なのに 止めどない奇跡を見て見ぬ振り

近道を探すたび遠回り 近すぎて見えていない本筋 通り過ぎて行く右回りと共に

それでも待っている いつでもいいと 手放す様に抱きしめてくれている ぎゅっと

もういいよ気持ち次第で見え方が変わる街 一人悲劇のヒロイン気取りに落とすピリオド

まだだよ何も測れない物差しを使い一掬い マイナスで満たせアルケミスト私を救いに

排気ガスと溜め息に笑顔がこぼれる街頭 私を愛しにストロマトライトの向こう

赤 青 黄色 問題視しないと見えてくる解答 33回転アカシックレコード

いいかげん自分の渴望にぐらい応えろ どこまでも続く自分の足跡を越えろ

予期した未来よりも現実はいつも驚きをくれるだろう 良くも悪くも

またどこかで誰かが生まれ死ぬ頃 背伸びする鉄筋コンクリートの墓標

パッチワークの空が微笑む頭上 矛と盾を捨てた綻んだ心

意識の膨張 無意識の感動 底辺だろうと頂上の表情

絡まった線をほどいて意図の外 DNAの螺旋階段を誇りに降り井戸の底

過去じゃないここ 未来じゃないここ あそこじゃないここ どこでもないここ

拝啓 遠回りする人生 諦めの先 受け止める題名

足枷 外して はてなの最果て 生きる事に飢え、生きる為に死ね

黎明 情熱と冷静 満ちては欠ける未完の情景

水面に写らない門出のしらべ 両手を広げ 風を泳げ

『無くす』

近づくと遠のく

離れていても側で『大丈夫』と呟く

刹那で繋がる

10万光年先の明滅するシグナル

痛みを欲しがる天邪鬼

君が選んだんだ 笑い泣く

疑わず信じる布団の地図

欲しいものはそこにある

何も持たず 全てがある

過去も未来も君は知っている

それじゃつまらないから忘れている

自分を思い出す為に間違える

もう苦勞も飽きたから運命を捕まえる

いつかは皆帰る

でも どうせなら楽しもうと越えて行く

受け止めると終わりの無い次が来る

愛すると言葉は無くなる

『hajimari』

生まれてから記憶があるまでの間

青を知らないまま見たありのままの空

雨の匂いに包まれた街中

雨雲を突き抜けた陽射しの暖かさ

風の囁きがカーテンを揺らしたら

目覚まし時計止めて『おやすみ』まで 本当の自分であったかな って悩んで

そこにあるものより無いものものばかり数えて 加速して 擦れた声

いずれ 肉体を離れるまでの暇つぶし なんて口にして ダメダメな死んだ眼

卑屈な理屈立てばかり上手くなって 下手糞で死ねないからいっそ殺してくれ

それでもお腹は減るもので ちょっとそこまで 矛盾を抱えて 誰か

教えてくれないでしょうか？ 味わいもせずに呑み込むから消化できず評価ばっか

素直になれれば また見せかけだけ元気な返事をしていた

運命にばかり期待をかけて 『どうせ』って 裏切った自分の可能性

あんなにも大きく思えたジャングルジムは こんなにちっぽけだったっけ？ あれ？

こんなにも夢を口にするのは 馬鹿馬鹿しくて難しかったっけ？ なぜ？

そんなに寂しく笑うなって すぐに思い出せる 変われるいつだって

だって いつの間にか無償の愛に包まれている事を忘れてただけ

陽が登り 陽が沈む 始まりと終わりはいつも側に在る
月が満ち 月が欠ける 見えなくても幸せはそこに在る
気が済むまで 知らない振りをして 遠回りして 怖くて黙ってた
年齢が嵩んで 沢山の言い訳を用意して 突き放してたのにまだ待っていた

生まれてから記憶があるまでの間
青を知らないまま見たありのままの空

雨の匂いに包まれた街中
雨雲を突き抜けた陽射しの暖かさ
風の囁きがカーテンを揺らしたら
もう聞くな 在るべき姿へ戻るんだ

陽が登り 陽が沈む 始まりと終わりはいつも側に在る
月が満ち 月が欠ける 見えなくても幸せはそこに在る

心臓 奥底忘れてた鼓動 分かっているのに何を問う
何度もすれ違う曲がり角 揃っているのに何を戸惑う
新しくも懐かしい波動 あなたらしく開け放つ窓

おはよう こんにちは こんばんわ

約束果たした後 また会おう

ありがとう